

# 日本語学習者の発話の自然性について ～アクセント句とイントネーション句の形成に注目して～

稲田朋晃

名古屋大学国際言語文化研究科大学院博士前期過程2年

inatomo@cty-net.com

## 1. はじめに

日本語音声教育の究極の目的は、学習者が「日本語らしい音声」を身につけることにあると思われる。そこで、どのような音声が日本語らしい音声かという観点に立った評価研究は、日本語音声教育のシラバス・カリキュラム作成を考えるうえで重要である。

本研究では、日本人に「自然である／ない」と判定された学習者の発話がどのような音声的な特徴を持っているかをイントネーション句形成とアクセント句形成の観点から分析する。

## 2. 先行研究

### 2.1. 音声評価に関する研究

音声が評価される観点としては、1)単音発音、2)アクセント、3)イントネーション、4)リズムなど、さまざまな要素があるが、なかでも、アクセントやイントネーションといったピッチ変動に関わる要素が「日本語らしさ」に大きく関わっているという(佐藤 1995 など)。

ピッチ変動に関わる要素として音声指導に積極的に取り入れられてきたのは、単語ごとに決まっている語アクセントである。しかし、日本語のアクセントをすべて暗記するのは学習者にとって負担が大きく、より効率的な指導法が求められている。

このような状況のもと、語アクセントよりも大きな単位であるアクセント句やイントネーション句を指導することの重要性が指摘されつつある(中川 2001、河野ほか 2004 など)。

### 2.2 イントネーション句(IP)とアクセント句(AP)に関する先行研究

日本語の音調は、フレーズ成分と語アクセント成分が折り重なるものとして表される。フレーズ成分は研究者によって様々な名称で呼ばれているが、本稿では Venditti (2005) に従って、これを2つに分類し、イントネーション句(intonation phrase、以下 IP と略す)、アクセント句(accentual phrase、以下 AP と略す)と呼ぶことにする。

AP とは、いくつかの語がひとまとまりに発話される際の音調単位である。通常、句頭の F0(基本周波数)の上昇によって定義づけられ、その内部にはアクセント核がひとつ(もしくはゼロ)しかない。一方、IP とは、AP がいくつか集まってできる音調単位である。通常、核を有する AP

が連続すると downstep (高音と低音が実現されるピッチ空間が、核のところに来るたびにだんだんと狭められていくこと)が起こるが、IPの境界では、この downstep がリセットされる。(前川 1998、Beckman & Pierrehumbert 1988)

IP、APなどの音調を規定する要因には、枝分かれ構造(窪園 1997)、外部フォーカスの位置(郡 1997)、八とガ、否定文・疑問文などの文型など様々なものがあると考えられている。

日本語学習者のIP、APに関する研究では、代田(1997)が、フランス語母語話者の日本語発話において母語の音調規則が日本語の語アクセント、イントネーション句に転移していることを明らかにしている。また、宇都木(2004)は、韓国語母語話者の日本語発話において、フォーカスの当たらない中立発話に問題があるとしている。

### 3. 研究目的

IP、APの形成と日本語らしさの関わりを考察した研究は、管見の及ぶ限りない。前節であげた「否定文・疑問文などの文型」によって規定されるIP、APは、誤りによって文の意味を大きく変えることはないものの、日本語らしさの評価に大きく影響すると考えられる。よって、本研究では以下の目的を掲げる。

日本語学習者(中国語・韓国語母語話者)の平叙文・疑問文・否定文がどのようなIP、APを形成しているかを分析・記述する。とくに、母語による形成パターンの違い、共通の形成パターンに注目する。

上記の発話のうち、日本語母語話者に「自然である/ない」と判定されたものがどのようなIP、APの特徴を持っているかを分析する。分析の際には、語アクセントの誤りによる評価への影響も考慮する。

## 4. 実験

### 4.1. 実験1(発話実験)

学習者の文読み上げ発話から、IP、AP形成のパターンを分析する。

被験者：中国語母語話者(東北方言話者)10名、韓国語母語話者(ソウル方言話者)10名(ともに中級～上級)、日本語母語話者2名

調査文：「ワインを飲みました」「次郎に眼鏡をあげました」「駅で次郎に荷物を送りました」の3つの文の、平叙文・否定文・単純疑問文・疑問詞疑問文。全15文。

例)

平叙文： { [次郎に] } { [眼鏡をあげました] }

否定文： { [次郎に] [眼鏡を] } { [あげませんでした] }

単純疑問文： { [ 次郎に ] [ 眼鏡を ] } { [ あげましたか ] }

疑問詞疑問文： { [ 誰に 眼鏡を あげましたか ] }

疑問詞疑問文： { [ 次郎に ] } { [ 何を あげましたか ] }

{ } は IP を、[ ] は AP を表す。それぞれ、母語話者の発話を分析したもの。

方法：調査文をダイアログに埋め込んだものを3回ずつ読み上げてもらい、録音。音声分析ソフトでピッチ曲線を観察・分析する。

#### 4.2. 実験2（聴取・評価実験）

実験1で得られた学習者の発話のピッチが日本語らしいかどうかを母語話者が判定する。

被験者：日本語母語話者10名程度

方法：実験1で得られた発話からピッチ曲線だけを取り出し、日本語母語話者の音声に合成する。つまり、ピッチだけが異なる音声素材ができあがる。これを被験者（日本語母語話者）に聞いてもらい、「日本語らしい～日本語らしくない」を7段階で評定してもらう。

IP、AP形成の正しさと評価の間に相関があるかを調べる。同様に語アクセントの正しさと評価の間に相関があるかを調べる。

#### 5. 実験1の結果（経過報告）

本節では、5名の韓国語母語話者の分析結果を示す。学習者の平均学習時間は433時間、滞日期間は18か月。話者ごとにそれぞれ特徴はあるものの、全体的に以下のようなことが分かった。

文型にかかわらず動詞句を独立したIP、APで実現する傾向にある。よって、否定文と単純疑問文に関しては母語話者と同じパターンになるもの（図1）、平叙文、疑問詞疑問文においては、母語話者と異なるパターンになる（図2）。

疑問詞疑問文のパターンが困難である。とくに長い文になると実現が困難になる。

全体的にピッチレンジが狭い。

話者によってはAP内部の音調が「へ」の字型にならず、ゆるやかな上昇を見せる。

#### 6. まとめと今後の課題

前節の結果は、宇都木（2004）で明らかになった韓国語母語話者の中立発話において最後の項を独立したイントネーション句で実現するという結果と類似している。今後は、実験1の残りの話者の分析を行い、実験2（聴取・評価実験）を行う予定である。

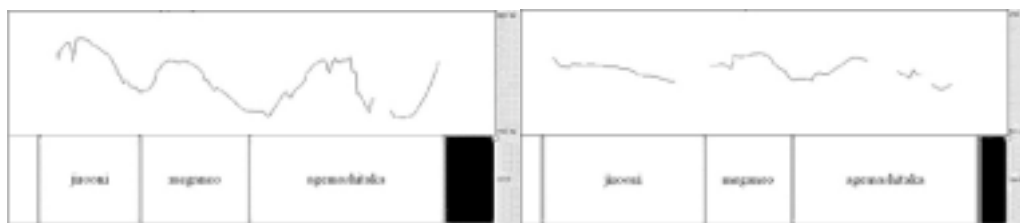


図1. 「次郎に眼鏡をあげましたか」のピッチ曲線。左が日本語母語話者、右が韓国語母語話者

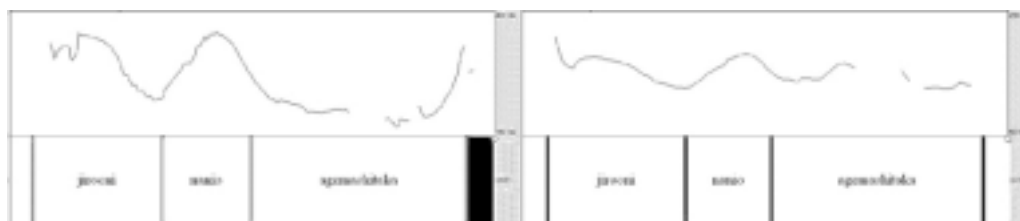


図2. 「次郎に何をあげましたか」のピッチ曲線。左が日本語母語話者、右が韓国語母語話者

## 参考文献

- 宇都木昭 (2004) 「韓国語日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」、音声研究、8巻1号：96-108
- 河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛 (2004) 『1日10分の発音練習』くろしお出版
- 窪園晴夫 (1997) 「アクセント・イントネーション構造と文法」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 郡史郎 (1997) 「日本語のイントネーション・型と機能」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」、『世界の日本語教育』5、国際交流基金
- 代田智恵子 (1997) 「日本語アクセントの習得とイントネーション・フランス語母語話者による日本語発話の音調特徴とその要因」『世界の日本語教育』7：113-135
- 中川千恵子 (2001) 「『へ』の字型イントネーションに注目したプロソディー指導の試み」『日本語教育』110：140-149
- 前川喜久雄 (1998) 「音声学」『岩波講座言語の科学』2、岩波書店
- Beckman, M. & Pierrehumbert, J. (1988) 「東京語の音調構造」、音声言語、近畿音声言語研究会
- Venditti (2005) The J\_ToBI Model of Japanese Intonation, in Jun, Sun-Ah (eds.) *Prosodic Typology*, 172-200